

苦さに負けずに味わってほしい

三年国語が『論語』に入ったようです。『論語』とは何たるかについて、授業者のS教頭が熱く語っていました。生徒たちは静かに耳を傾けていたようですが、中学生の彼らに、『論語』はどのようなように映るのでしょうか。私は興味津々でした。

私も『論語』に関する本を読んだり、自分の文章に積極的に引用したりしています。これまでのこのメッセージにも、何度か使いました。その度に、「『論語』の偉大さはすぐにはわからないだろうなあ」と思っています。とりわけ、自我が芽生える思春期の若者には、「説教くさい言葉」として映っているような気がします。

『論語』の中の孔子の言葉は、服用すればすぐ効きめが表れる即効薬ではなく、だれもが敬遠しがちな苦い苦い漢方薬です。苦さに負けて服用しなかったら、状況は何も変わりません。苦くても毎日毎日飲み続けると、じわりじわりとその効き目が表れます。その苦さについても、慣れてしまえば抵抗がなくなります。「苦いから嫌」なのか、「苦くても飲む」なのか、どちららを選択するかで、結果がずいぶん違ってきます。

『論語』は具体的に語られていないところに意味があると私は思います。

「口がうまく、にやにやした表情をしている者ほど、優しさに乏しい。」（巧言令色鮮なし仁）

『論語』の中で孔子はこう言っています。だれのことを指しているのか。どんなことを言ったり、どんな顔をしたりしているのか。このような具体的な内容は一切語られていません。言い換えると、語られていないということは、それは読者の判断に任されているということなのです。

したがって、自分の経験の中で思い当たることがある者は、この言葉が実感できるでしょう。思い当たることのない者は、ある日ある時にそれを実感することになるでしょう。人生経験が豊かではない中学生は、恐らく後者ではないでしょうか。

S教頭が力説していたのは、「『論語』が誕生したこの日本では石器が作られていた」ということです。歴史的にも文化的にも日本とは比べものになりません。今でこそ何かと厳しい言葉が向けられる中国ですが、日本は中国から多大な影響を受けてきたことは事実です。

思想も言語も、そして、人としての生き方も。そんな中国の、いや、世界の偉大な思想家の孔子の言行録である『論語』を、三年の皆さんには、苦さに負けずに味わってもらいたいと私は強く思っています。

（五月二十六日記）



論語の授業